

## Movie Review 9 #アウトブレイク

『#アウトブレイク』(Outbreak:1995 年) は、ウォルフガング・ペーターセン監督作品。amazon prime video で鑑賞した。原作はロバート・タイン。

コロナ感染症が猛威を振るう 24 年前に、それを予見した作品と言えよう。日本ではクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客で、2020 年 1 月 25 日に香港で下船した 80 代男性が COVID-19 に罹患していたことが 2 月 1 日に確認された。2 月 3 日に横浜港での検疫の結果、31 人中 10 人で SARS-CoV-2 RNA が検出された。その後 4 月 15 日までに確定症例 712 例が、少なくとも 14 例の死亡が確認された(致命率 2.0%)。このようなコロナ禍でビッグコミック誌が休刊時に、再掲載されて NHK でも取り上げられて話題になった作品がある。ゴルゴ 13 が乗っていた客船で原因不明の感染症が発生する。その原因がサルで、サルの血清で危機を乗り越えるというストーリーだが、これは『#アウトブレイク』をヒントにしたのではないかと推測される。

アフリカの M 川流域で原因不明の出血熱が流行する。調査の為に現地を訪れた米国陸軍は蔓延を恐れて、感染者の血液を採取した後、隠蔽と封じ込めのため部隊のキャンプを爆弾投下で壊滅させる。

時は流れ 90 年代、M 川流域の小さな村で未知の出血熱が発生する。米国陸軍所属の研究機関員 D が調査に赴くと村は全滅状態となっていた。D はウイルスの致死率の高さと感染者の死に至らしめるスピードの早さから危機感を抱き、軍上層部と CDC に勤務する元妻に警戒通達の発令を要請する。

そんな折、アフリカから 1 匹のサルが貨物船乗組員により米国に密輸入された。そのサルを田舎町にあるペットショップへの売りに失敗した J は、持て余したサルを森に放す。その後、サルの飲んでいた水を顔にかけられた J と、空港到着時に彼とキスをした恋人が M 熱を発病し搬送されるが、病院の医師は病気の正体が分からず保健当局へ通報。謎の熱病発生の報告を受けて D から聞いたウイルスの話の思い出、現地へと向かい聞き取り調査を試みるも、何も聞き出せないまま二人は死亡。解剖の結果正体不明の出血熱である事が判明し、CDC は警戒通達を発表。

そして、あのサルに腕を引っかかれていたペットショップの店長が M 熱を発症し死亡。更に、不注意で血液を浴びた技師が、急な体調不良を自覚しつつも恋人と町の映画館へ行ったのを機に、飛沫感染によって爆発的な感染が始まってしまう。

一方上層部は、この伝染病が以前 M 川流域で派生した伝染病と同じであることに気づく。かつて患者を抹殺して持ち帰った血液は、最近兵器として保管されており、治療用の血清も作られていた。少将は、当初から「封じ込め」を念頭に田舎町へ完全武装の兵士と攻撃ヘリで派遣し封鎖させる。正義感の強い D に細菌兵器の存在を知られることを恐れて、彼を今回の伝染病対策から外したが、人命優先の D は命令を無視して密かに部下と共に田舎町へ飛び、CDC のチームと協力して治療法の研究と感染経路の特定を進める。

その最中、宿主のサルから感染した別のサルが、軍から運び込まれ患者に投与されていた血清によって回復する。D は既に血清が作られていたことで細菌兵器にされた M ウイルス（アフリカン M）の存在に気がつく。ウイルスに変異（ヤンキー M）の兆候も見られる。

その矢先、D の元妻が不慮の事故で感染・死亡して、同僚も彼から採血する際に偶然注射針で指を刺し感染してしまう。彼女が発症する前に血清を完成させようと奔走する D は、部下の少佐と 2 人で陸軍のヘリを盗み、感染源の調査を続ける。

一方、上層部は田舎町へ燃料気化爆弾を搭載した爆撃機を差し向ける。宿主であるサルが森に逃がされたことも突き止めた D らは、軍からの追っ手を振り切りつつサルを捕獲、アフリカン M 用の血清をベースとして、ヤンキー M 用の血清を合成する。

結局、田舎町は爆撃機の爆弾投下で消滅してしまうのか。瀕死の元妻は回復することができるのか。

劇中に登場する M ウイルスは架空のものである。高熱、下痢、全身や消化管からの出血などエボラ出血熱に似た症状を引き起こすとした。

より最近作られたコロナ禍を予見した作品に『コンテイジョン』（Contagion）がある。2011 年のスティーブン・ソダーバーグ監督作品。豪華有名俳優が多数出演。実習に来た研修医・医学生に推薦している。

本作の肝は、発症 2 日目から始まり、最後に第一日に戻ることにある。

香港での所用を済ませた E は、けいれんを起こし意識を失う。E の夫は病院に運ぶが、E は死因不明で病死する。夫が自宅に戻ると継子がそっくりな症状で死んでいた。

生物兵器によるテロではないかとの懸念が起こる。CDC は調査で発生源を E までさかのぼって突き止める。ウイルスが広がるにつれ、米国各地はロックダウンされ、強奪などが発生する。CDC は、ウイルスがブタ由来の遺伝物質とコウモリウ

イルスの合成物であることを突き止めるが、治療の研究は行き詰まる。そうこうするうちに、全米では 250 万人、全世界では 2600 万人が死亡している。

物語の終幕には、感染源の根源が回想シーンとして一日目が描かれる。中国で E が感染する何日も前に、E が取締役を務める会社が木をなぎ倒しコウモリが飛んで逃げていく。その 1 匹が豚小屋に飛び込んでバナナを落とし、そのバナナをブタが食べてウイルスの宿主となる。そのブタは香港に運ばれて屠殺され、それを調理したコックが手を洗わずにカジノで E と握手をした結果、ウイルスが彼女に感染していたことを明らかにしつつ幕となる。

人間にとって都合の良いように自然を改悪したことが、ウイルス禍をもたらしたのだと示唆している。